
手ノヒラ

鎖骨ロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手ノヒラ

【Nコード】

N9569M

【作者名】

鎖骨ロック

【あらすじ】

最近本を読むようになり初めて書いてみました。

恋愛にかける純情な女の子を出来るだけストレート表現しました。

女の子って、結構こんな感じがします◎

・・・――ねえ知ってる？

この手ノヒラの中には、運命が刻まれてるんだって。

私がそれを知ったのは、誰だって知ってる占い。

そう、手相よ。

そんな曖昧で不確かなモノなんて、私は絶対に信じたりしない。

自分で体験して見ない限り、絶対に。

その入口は迷惑メールにっていた広告だったの。

そこにあつた手相のホームページによると、

私の運命は…？

生命線と運命線が…、えっと…？？

どうやら一般的な感覚を持った女の子で、どんな人にも対応している性格の持ち主みたい。

どうだろ？

まあ確かに今まで人付き合いに苦労してきた気もするけど、結局場面に応じて対応してきたような気もしなくもないし。

まあどれも普通に、人並み程度に。

特別なことなんてどうやら無いみたい。

なーんだ、やっぱつまんない。

思った通り微妙な感想。

他に何か面白いことは書いてないのかな？

「思い通りの運命を。」

何だろ？

私はなんとなくそのリンク先のページへ飛んだ。

「手相を手にも刻むことで思い通りの運命を手に入れることができます。」

そのサイトには様々な種類の手相が並んでいた。

中には、こんな滅茶苦茶な形の手相なんてありえないでしょ。って感じのもたくさんあった。

「お金持ちになるための手相」

「人気者になれる手相」

「結婚できる手相」

細かいのもたくさん書いてある。

「足が速くなる手相」

「成績が上がる手相」

「良い夢を見れる手相」

中にはダークな手相も。

「怪我をする手相」

「病気になる手相」

「交通事故にあう手相」

ぱっと見、全部で100パターンくらいあるのかも知れない。

こんなにたくさんのパターンを考えるだけですごいわ。

こんなに頑張ってるし、どれか一つ試してあげようかしら。

こういうくだらないことに力注いでる人がいるのを知ると、

なんだか馬鹿馬鹿しくて少しかわいそうになるから、

勝手に「優しくしてあげましょう。」って気分になった。

しかもやり方は簡単だし。

ただペンで書かれている手相を真似て、自分の手のひらに書くだけ。

くだらなすぎて笑える◎

どれがいいかしら？

じゃあ、私はこの：

「異性にモテモテになる手相」

いやいやありえない（笑）

でもまあ単なる遊びだし、いっか◎

——…・・・

私はホームページ通りにペンで手相を書いて、次の日学校に向かった。

その日は少しだけの期待を持っていた。

本当にホントに、ほんの少しだけの期待を◎

実は私は同じクラスに好きな人がいた。

名前は和哉くん。

あまり話したこともないし、

自分から話すことも出来ないけど、

格好良くて、優しくて、

私の初恋の人なの。

和哉くんの方をさりげなく見てみるけど、

やっぱりそんな簡単に運命なんて変えられないわよね。

和哉くんは女子によくモテるし、私には無理。

これで良いの。私はこれで…。

思えるだけで…。

何事も無く最後の授業が終わりを告げた。

今日はママが料理手伝って欲しいって言ってたから少し急いで帰らなきゃ。

帰ろうとして立ち上がった時、誰かが目の前に立ちはばかって前に進めなくなった。

何？誰？

顔を見てみると和哉くんだった。

「ちょっと話、いいか？」

え？全然嬉しいけど、何これ？こんなこと今まで一度も…。

私は午前中に少しだけ浮かべていた期待を思い出して、ウキウキしてきた。

もしかして…、手相の力が早くも効いてきた?! …なんて◎

和哉くん呼び出されて、私は今使われていない教室までついて行った。

「話って…?」

私の顔はすでに笑っていたと思う。

「お前に話しがあるヤツがいんだよ。聞いてやってくれ。」

そう言って呼ばれてきたのは和哉くんと仲の良い竹田くんだった。

私は竹田くんのこととはあまり知らない。

和哉くんの友達だったことくらいかな?

悪い人じゃないと思うけど…。

その日、私は和哉くんの友達の竹田くんに告白された。

なんて言われたかあんまり覚えてないけど、丁重にお断りして帰ってきた。

私はその日の夜、竹田くんのことなんて考えてられなかった。

そんなことよりこの手相：

偶然かしら？

でもこのタイミングで告白されることなんてある？

多分、この手相は何かすごい力を秘めているのかもしれない。

私はお風呂で手ノヒラに書かれた黒い線をボディークリームで落としながら、

次はどんな運命の手相にしようかとばかり考えていた。

次の日から私はサイトに書かれている色んな手相を試した。

「お金持ちになれる手相」

「良い夢を見れる手相」

「嫌いなものが食べられるようになる手相」

「好きな人と話すことが出来る手相」

すると、突然ママにおこづかいがもらえたり、大好きな和哉くんの夢が見れたりした。

本当に信じられないんだけどあれほど大っ嫌いだったトマトをちゃんと食べれたの！

それにこの手相があれば和哉くんと話すことも出来た！

小さいことから大きいことまであるけど、私は運命をどれもこれも自由に操れる。

ママは私の手のひらの落書きを不思議がって聞いてきたけど、運命を操る手相って教えたなら、

なんだか「ふくん」って感じ。

全然興味無い顔をしてた。

ママったらすごく勿体無いことしてる。

こんなにすごい力を持ってるのに…。

私は確信してる。

手相は絶対なの◎

だから私は今度、この手相を書くつもり。

「大好きな人を自由に操れる手相」

感情線と運命線を深く結びつけるの。

今の私の手相じゃ、感情線と運命線がすれ違ってる。

これじゃダメだわ。

早く運命を変えないと。

私は、ペンでしっかり二つの線を書き直し、結びつけた。

これで明日から和哉くんは私だけのもの。

ああ…。

明日が楽しみで今夜は眠れないかも◎

⋮

次の日、私は和哉くん朝一番に挨拶をした。

普段と変わらない様子。

そうそう、偉いわね。

皆の前じゃ普通にしていなきゃダメよ。

放課後になったら二人で話そうね◎

それにしても今日の授業はやけに長くてつまんない。

午後になれば体育もあるし。

和哉くんのスポーツする姿を休んで見学するのは楽しいんだけど、

今日はその分の休みが溜まりすぎてて授業出なきゃいけないし…。

体育はまたバレーか。面倒くさい…。

はあ、やっと一日の授業が終わった。

これから放課後が始まる。

授業の終わりと同時に放課後の始まりのチャイムが鳴った。

教室内は皆、それぞれに帰り支度を始める。

私は皆に気付かれないように、和哉くんにと手紙を渡した。

「この間の教室に来て」

手紙の内容はそれだけだった。

だって十分だったから。

和哉くんは私のモノなんだし◎

でも私とその教室へ先に向かおうとした時、

和哉くんが私を呼び止めたの。

「ゴメン！今日友達と約束あるから！」

そう言って和哉くんは立ち去ってしまった。

なんでよ？

なんで？？

なんでなんで？？？

私は手のひらを開いて手相を確認した。

手のひらの黒い線は汚くにじんで途切れていた。

体育でボールを触ったせいで消えてしまったんだ…。

そうだった…。

線が引かれているときだけしか手相の効果は無い…。

私の描いた運命は再び元の手相の運命に戻ってしまう…。

でも私はその時、とても素敵なことをひらめいたの。

その素敵なことってね。

手ノヒラに絶対消えない特殊な線を書くの。

絶対に消えないから手相の効果も永遠なのよ。

魔法みたいで素敵じゃない？

私は運命を決めたの。

私は和哉くんとずっと二人だけ。

私は和哉くんを絶対に裏切らない。

だから、和哉くんにも私を絶対に裏切らせない。

コレって普通に当たり前のことよね？

愛の力って本当に素敵◎

愛のためなら私、多少傷つくことがあっても怖くもなんともない。

私には和哉くんがいるから◎

この絶対に消えない特殊な線なんだけどね。

もちろんどこの文房具屋さんでも売ってるわよ。

私は、細めの可愛いピンクのにしたわ。

今夜、このカッターで消えない手相を書こうと思うの。

愛のためだものしくらい痛くても全然平気◎

その日、一人で部屋で手相を書くことにしたの。

ママに説明したって分かってもらえないもの。

悪気なんて全く無いわよ。

コレは私の愛なんだから。

愛こそは正義なのよ。

まずは感情線ね。

サイト通りの曲線になるように丁寧に線を入れたわ。

手ノヒラに薄く紅い血がにじんできた。

綺麗な曲線だけど、

ダメダメ、全然ダメ。

少し慎重に成りすぎたみたい。

まだ線が薄すぎるの。

和哉くんともっと深く繋がっていたい。

私の思いはこんな浅くないの。

私は鉛筆握りから手を持ち替えて力を込めた。

ゆっくり深くに突き刺していくとさつきより濃い赤が手ノヒラに溢れた。

私は愛は赤色だと確信してうっとりした。

私の顔はすでに笑っていたと思う。

でもこの時初めて声を出して笑ったの。

嬉しくて、苦しくて、愛しくて。

自分の感情の深くをえぐり出すように、感情線を裂いた。

後は、運命線を深くつなぐだけ。

これで和哉さんと私は結ばれる。

二人の運命は決まる。

そのはずだった。

私はそのときまだ気付いていなかったの。

ママが部屋のドアを開けたことに。

「何してるのー！?!?!」

ママはビックリして叫びながら私の手からカッターを取り上げた。

私は和哉さんと繋がることを許されなかった。

ママが私からカッターを取り上げたとき、私の手ノヒラに余計な消えない線を残してしまったから。

私の手ノヒラは乱雑な複数の線が刻まれてしまった。

これではあの「大好きな人を自由に操れる手相」を絶対に描くことが出来ない…。

そんなのおかしいよ。

私はこんなに和哉くんのことを思ってるのに…。

ママ…。

何か良い方法はないのかな…。

私はサイトの隅々まで目を通して読んだ。

そしてある恐ろしい手相に辿りついた。

「死相」

この手相は死の予兆を表す。

この手相を刻むことで死に至らしめることが出来る。

えっ???

何?この手相???

私は「死相」についての文章を良く読み返してあることに気付いた。

この手相の形、私の手ノヒラのキズの通りの線だ………――

――嘘よ!!!!

自分の手ノヒラとサイトの画像を何回も何回も見比べて確認したわ。

誰がどう見たって「死相」そのものに間違いない。

今まで愛おしく眺めてきた自分の手ノヒラを伏せて見えない場所に隠した。

無理矢理心臓を落ち着けてから、そつともう一度覗いてみた。

やっぱりキズが付いている。

全身の血液が逆流するような衝動が体を駆け巡った。

ありえない！！ありえない！！！！

私はママからこっそり取り返し、隠していたあのピンクのカッターを取り出した。

私はこんな運命は絶対にイヤ！！！！

もう、すぐそこまで死が近づいている。

説明したってママも、誰も、信じるわけない！！

手相は絶対！！

それを知ってるのは私だけ！！

自分でなんとかしなきゃ！！！！！！

私は細いカッターの刃を手首に押し当てた。

早く自分の体から切り離してこの運命を断ち切らないと！！！！

どんなに力を込めてもカッターの刃は腕の途中で止まって動かない。

何度もカッターを激しく上下に動かした。

でも華奢な刃と私の腕力では、骨を断つことは出来ない。

カッターの刃が折れて、紅い血が吹き出した。

結局、私は手相の運命から逃れることは出来なかった。

手相が示した通りの運命が待っていた。

こうなることは私だけが知っていた。

手相は絶対なのだから。

その後、私はリストカット自殺として報道された。

学校側はいじめの事実の確認されていないと発言してる。

ママは私のことを思ってたか、学校側と対立して生きる気力にしてる。

表面上はよくある話、私だけしか真実は知らない。

私は運命と戦って死んだの・・・。

愛のために◎

(後書き)

初めての作品になります。

女の子の気持ちになって純情で狂った恋を描いてみました。

参考にして行きたい思いますので、何か感想があればお願いします

◎

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9569m/>

手ノヒラ

2011年10月7日17時52分発行